

2014/6/1

しろひげ@Kurobane です。

6月になりました。

この時季、緑陰で、あるいは雨の音を聞きながら、たまには詩をよみたい。

「よむ」は「黙読」でも「朗読」でもいいし、吟じられてでも、諳（そら）んじられてでもいい。

つい数日前の午後、この月をそのままに戴く「茨木のり子 六月の会」の仲間たち数名と朗読を楽しんだ。

詩は、「りゅうりえんれん」、茨木さんの選りすぐりの言葉による散文詩である。

戦時中、中国から強制連行され、北海道の山中で14年間も逃亡生活を送った後に、

故国にやっと帰ることが出来た劉連仁を描いた叙事詩でもある。

どんな戦争小説や反戦映画よりも、一篇の詩が戦争の残酷さを伝え、歴史の隙間を埋めることを思い知らされた。

30分あまりの朗読を終えると、声を出すことで、詩は（字句のもつ）意味からの束縛を逃れ、わが身の奥底に沈んでいくことがわかった。

最上の詩句を口中にころがすとき、これほどまでに私たちに魅惑するとは・・・、という余韻も消えぬまま、ふと見つけたのが別の詩人による、ずばり「六月」という詩である。

その一部を抜粋しよう。

この日 / 私は六月で / 恋人は若いアポロン / 私のまわりは / たえず快い風が流れ
/ 可憐な / 喜びの声を上げている

作者は塔和子、本の名は、『愛の詩』（編集工房ノア）。

書名といい、詩の内容といい、明るく、屈託がない。

作者の身の上を知らなかったら、心地よい詩、の評言ひとつで通り過ぎてしまうだろう。

塔さんは、ハンセン病を発病した14歳の時から、ずっと国立療養所に強制的に収容され、
「らい予防法」なる古めかしい法律が廃止される1996年まで、離島での生活を強いられ
た。

塔さんは、作品を発表する24歳から、83歳に生涯を閉じる今年の夏まで、井土ツヤ子と
いう本名を隠してきた。家族が差別をうけないようにするためである。

その一生は、朝日新聞の天声人語（2014.5.19）にも取り上げられたが、劉連仁（りゅ
うり えんれん）といい、井土さんといい、人を破滅に導く権力の恐ろしさと、それに翻弄され
る一生が痛ましい。

昂揚して叫んだり、苦しさのあまり呻いたりせずとも、人びとをある種の奇蹟へと導く人こそ、
誇らしい詩人と呼ばれていい。

声高の大言壮語を嫌い、どんな苦しい胸のうちを歌っても、明るさとユーモアを忘れな
かった、茨木さんや塔さんが創る詩は、時代を経ても一向に古びない。

心がささくれ立つことが多い今だから、そんな詩をよもう。

追伸

東京の世田谷文学館で「茨木のり子展」が4月19日から開催されています。6月29日

(日)まで。関連イベントなども企画されています。問い合わせは

[hht//www.setabun.or.jp](http://www.setabun.or.jp) まで。

黒羽根整形外科

黒羽根 洋司